

# 日本スポーツ社会学会会報

# Sport Sociology

第17号

目次

新会長挨拶	1
前会長挨拶	1
第6回大会を終えて—大会実行委員	
事務局からの御礼—	2
国際シンポジウムの報告	3
一般発表／国際セッションの報告	6
編集委員会からのお知らせ	12
事務局からのお知らせ	14
理事会報告	15
総会報告	17
図書紹介	19
掲示板	22
新入会員／住所・所属変更	24

日本スポーツ社会学会  
Japan Society of Sport Sociology  
事務局：奈良女子大学 1997.6月

# 1997 スポーツ六法 伊藤 堯 編 新訂版 山田良樹

基本法はもちろん、スポーツのあらゆる場面を想定した条例・規則・通達等多数収録！

体育・スポーツ事故判例、保険制度等の資料もさらに充実、関係者必携の書！

最近のわが国では、生活水準の向上や余暇時間の増加に伴い、国民のスポーツ志向はかつてない高まりを示しており、「みんなのスポーツの時代」と言われるように、あらゆる階層・年齢層の人々があらゆるスポーツに積極的に参加するようになってきている。こうした状況を背景として、スポーツ振興は国の最重要施策となっており、またスポーツを楽しむ人、スポーツを指導・管理する人も、単にルールやマナーだけではなく、スポーツに関連する必要最小限の法知識が必要となっていることも確かである。

本書はこのような現在のスポーツ事情に対応し、関連法体系を基本としつつ、法律研究者・実務家はもちろん、スポーツを楽しむ人、その指導・管理に当たる人、ならびに将来指導的立場に立とうとしている体育系大学生を対象として編集されたものである。

- 第一編 基本法 [スポーツ基本権について]
- 第二編 スポーツ振興 [21世紀におけるスポーツ振興の重要性]
- 第三編 事故・責任 [スポーツ事故をめぐる法的諸問題]
- 第四編 スポーツ安全 [スポーツ振興と事故対策の重要性]
- 第五編 学校スポーツ [学校における体育・スポーツ事故と教師の対応]
- 第六編 組織・運営・その他 [スポーツ行政関連法令の体系と多様化するスポーツ]
- 資料編 体育・スポーツ関係表／文部省体育局所管法人一覧／保険制度一覧／体育・スポーツ事故判例一覧／事故判例の取り扱い方／保健体育審議会答申等一覧／関係法令等

B6版 本体2816円

増補  
改訂版

体育・スポーツ事故判例の研究

伊藤 堯／佐藤孝司 著  
A5版／本体3689円

〒171 東京都豊島区高松2-8-6 TEL(03)3955-5175 FAX(03)3955-5102

道 和 書 院

新会長挨拶 井上 俊

2年前、池井望先生にバトンをお渡ししたとき、私の役目はお終わったと思っていましたのでいささか困惑しています、というのが正直なところですが。むしろ新しい方をお願いしたほうが、気分一新の効果もあってよいのではないかと思うのですが。とはいっても、もちろん私は、この学会の将来を危ぶんでいるわけではありません。その点については、きわめて楽観的です。

たしかに、この学会は理事会や編集委員会の開催も思うに任せないほど貧乏ですが、会員ひとりひとりの創意工夫、それを生かしていく連携プレー、手弁当を辞さない自発的エネルギーなどは、経済的困難を補ってあまりある精神的財産です。今年の3月に立命館大学で開催された第6回大会／国際シンポジウム／の成功も、この種の力によるところが大きかったと思います。

日本スポーツ社会学会を支えている、こういう独特の気風を大切にすること、それ以外には特別の方針とてありません。私にはそれで十分だと思われまます。今期は、理事長を引き続き宮内孝知理事に、学会誌の編集局を法政大学（平野秀秋理事）をお願いするとともに、事務局を奈良女子大学（江刺正吾理事、菊幸一理事）をお願いすることになりました。また、来年3月に予定されている第7回大会の開催校は神戸大学（山口泰雄理事）にお引き受けいただきました。自由な知的交流の場としての学会の発展のために、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

前会長挨拶 池井 望

本会報の11号（1995年7月30日）に、おこがましくも新会長挨拶を書いたのが昨日のことのように思われます。あまり会長らしいこともしないまま過ぎてしまい、古いきまり文句ですが、内心忸怩たるものがあります。

それでも期間中、まことにいろいろなことがありました。最も大きなことは、そして私にとって……いささかタナボタ的ではありますが……たいへん光栄なことは、やはり第6回大会での国際シンポジウムの成功でした。予算の問題、国外研究者の連絡、賛同の問題をはじめ、レジュメの双方向への翻訳、会場設定、通訳の問題、招待研究者の案内、出迎えと宿舎の問題ばかりでなく、外務省、文部省、ジャーナリズムとスポンサー関係の問題、さらには最も大事な本来のスポーツ社会学会との時間とウエイトの調整の問題等々、いざ実行委員会を発足させてみると、当時の委員会のメンバーにとっては、まさに天文学的にすら見えた難問の数々がひかえていました。

しかし、これらも研究委員会研究委員長 伊藤公雄先生や、当番校である立命館大学の山下高行先生をはじめとする、菊幸一、杉本厚夫、上杉政幸、小椋博諸先生のたいへんな御努力により完成にこぎつけました。もちろんここまで来ましたのには、私の思いおよばぬところで……たとえば学生諸君、大学院の方々のような……御尽力をいただいた、まことに多くの人々のおかげがあります。いちいち御名前を上げることはできず申し訳ありませんが、心より御礼申し上げます。

また、このシンポジウムの最後の仕上げとして、世界思想社、高島国男社長、秋山洋一

編集長の御快諾により、その成果を活字にする予定になりましたことも、あわせて御礼申しあげたいと思います。

二つめは、総会での次期理事会発足の不手際でした。ご承知のように、すでに理事定員数の改正案がでていたにもかかわらず、旧則のままの選挙を実行してしまい、会員の皆様には、たいへんな御迷惑をおかけしました。さいわい温情あふれる解決案を提起していただき、なんとか総会を維持できましたことは、これもまた御礼の申し上げようがございません。

最後に、悲しいことは、われわれ会員の貴重な人材を失ったことです。私の就任直後(9月9日)に多々納秀雄先生を、次年の8月30日については唐木国彦先生の訃報に接しました。それぞれ49歳、55歳という信じられはしないう若さで逝ってしまわれました。つつしんで御冥福をお祈りしたいと思います。

不十分ですが、以上の報告をもって御挨拶に代えさせていただきます。

---

#### 第6回大会を終えて —大会実行委員会・事務局からの御礼—

---

立命館大学 山下高行

日本スポーツ社会学会、第6回大会・国際シンポジウムへのご協力本当にありがとうございました。外務省、読売新聞などのビッグネームがスポンサーとして付いていましたので、資金が豊富と誤解された方もありましたが、実情は火の車を遙かに越える状況でした。この中で大会を成功させるには、多くの人のご協力が不可欠でした。物心両面にわたるご協力、仕事の受けおい、招待者の宿を提供してくれるなど、本当にありがとうございました。一時期実行委員会はノイローゼ状態になり、開催が危ぶまれるほどでしたが、皆様の励ましで乗り越えることができました。

実行委員会がこのシンポでねらいとしたのは、第一に諸外国研究者と交流のパイプをつくることでした。ノルウエー研究者とプロジェクトがスタートする事になったこと、また韓国研究者と強い交流のパイプができたことなど、多くの研究交流が進みました。またアイヒベルグ氏からも研究交流の要望が出されています。事務局が全て把握できておりませんので、まだ他にもいろいろあるかと思えます。大会後、海外参加者からいくつもメールが届いており、今後とも交流していきたい旨の聲が寄せられました。研究部に働きかけて、会報などで研究交流の情報を紹介していきたいと思えます。この意味で第一のねらいは成功しました。

第二は、世界の先端の研究とぶつかり合うこと、このことをねらいとしました。これについては個々の報告を御参照していただければ幸いです。大会終了後事務局に寄せられた連絡では大きな刺激を受けたとの感想が目立ちました。第二のねらいも成功したと言えるのではないかと自負する次第です。このような刺激を、今後私たちの学会活動の中でどのように位置づけていくか、課題になっていると思えます。ともあれ大きな試みでしたが皆さまのご協力で無事乗り越えることができました。実行委員会・事務局一同心から感謝いたしたいと思います。

尚、当日の抄録集(A4版、約240頁+追加資料約100頁)の残りを領部いたしております(郵送費含み3000円)。ご希望の方は山下までFaxまたはE-Mailにてお申し込み下さい。

Fax: 075-466-3157 (研究室)

E-Mail: yama @ kic.ritsumei.ac.jp

---

#### 国際シンポジウムの報告

---

##### ・ワークショップ/セッション1

「スポーツが変えるアジア —アジア初のW杯共催をめぐって—」

2002年のサッカーW杯開催について、日韓共催の側面ばかりが目されているが、国内10都市の開催に伴う財政的問題など、別に考えなければならない点もある。屋根付きのスタンド建設を見送った広島市の判断が後日、評価されるかもしれない。しかしここでは日韓共催に焦点を絞って「スポーツはアジアを変えるか」のテーマに接近したい。シンポジストの一人、佐山一郎氏も指摘していたように、約1年前の今ごろ、W杯の日本開催をめぐってマスコミも人々も盛んにそれを話題にしたが、共催決定後は逆に驚くほどそれが話されることが少ないように思われる。「もう終わった」という感じなのだろうかあるいは開催間近かになって大騒ぎするのであろうか。日韓共催を機会に両国の関係改善を期待するのであれば、このどちらの態度も望ましくないように思われる。

##### 1 共催への期待

共催をきっかけに好ましい日韓関係の構築を期待する声は強い。しかし発表者の共通意見として、共催即友好関係の樹立、の考えには疑問が投げかけられた。韓国の社会学者であるLee教授が紹介した韓国側の対日観や共催問題への調査結果は予想以上に我々日本人にとって厳しいものであった。「共催をきっかけに今後両国の関係はよい方向に進むか」の問いに、韓国国民は「よい方向に進むよりも「そうは思わない」のほうに割合が高かった(それぞれ36%と48%)。日本では逆の結果で、「よい方向に進む」とした人が多かった(それぞれ47%と36%)。韓国では悲観論が、日本では楽観論が比較的多いという結果だった。

しかしJ. ホーン氏が発表の結論部で述べたように、グローバリゼーションの一つの過程として、「個人が自分のおかれている日々の生活の条件から少なくとも象徴的に一距離を置き、他の生活や生活条件に関する考え方を獲得する」ことが可能であるならば、共催を機会に関係改善への可能性もないわけではない。「今、日韓に必要なことは、サッカーの強化それ自体に立ち返り、…創意工夫のある、日常的なスポーツ環境作りのための協力関係を確立することである」という佐山氏の具体的提言は貴重である。

##### 2 草の根(市民)レベルの交流

中島信博氏は、Jリーグの発足がこれまでになかったタイプの地域スポーツクラブ発達の刺激になっていると言う。そのため日韓共催は巨大イベントの国家的仕掛けとしてだけでなく、市民での日韓のサッカー交流も始まっており(仙台市、塩釜市)、草の根レベルでの相互交流がサッカーを通して実現されている。

##### 3 研究者レベルの交流

今回の国際スポーツ社会学シンポジウムにおいても、日韓の研究者の交流促進が意図された。これまでどちらかといえば我が国の場合、欧米との交流が多かったように思われるが、W杯の日韓共催をきっかけに、体育やスポーツの領域はもちろんのこと、その他の幅広い研究分野で日韓およびそれ以外の地域の研究者の相互交流が始まろうとしている。今年10月には中国の西安市で、「シルクロードと身体文化」のシンポジウムがア

ジアの研究者によって開かれる予定だし、12月には、韓国で、「W杯韓日共催国際シンポジウム」が韓国体育学会によって開催される。このワークショップ1では、必ずしも議論を満足ゆく程度まで深めることはできなかったが、W杯のアジア初の開催のさまざまなインパクトについて、研究者のレベルで討議されたのは我が国では始めてではないかと思われ、今後のこの種の討議の場を盛り上げる一つのきっかけになったのではないかと思われる。(文責 小椋 博)

・ワークショップ/セッション2  
「現代社会の変容とスポーツ文化」

第2セッションは、各国のスポーツ文化を論じる中で、現代社会のどのような変容がスポーツ文化のあり様を規定し、そこでは何が問題となるのかを議論することが期待された。フランスのポシエロ教授は、P. ブルデューの理論的枠組みから文化生産と文化消費の対象としてここ30年間の自国のスポーツ文化の変容を追いながら、スポーツの場(シャン)の構造とそれぞれの場における機能を図式化した。ここでは、これまでの主要なスポーツの場であった[国家-スポーツ連盟]、[自治体-学校]といった社会統制的なスポーツ生産の場から、[レジャー-イベント-プライベート]といった消費の場への移行と両者の軌轍が示された。

この後者をめぐる問題を日本の消費社会とスポーツ文化の変容に当てはめて、単に従来のようなメディアによる商業主義の立場から論じるだけでなく、消費される身体の立場から論じようとしたのが、杉本教授であった。メディアと身体との関係は、後者が前者によってコントロールされるという単純な図式で説明されるものではない。メディア・リテラシーに気づく身体は、例えば日本の大相撲の勝敗の決定方法にみられるように、実は日本の文化に長い間根づいてきており、このような全体システムの見直しを図ることが「消費」の論理に絡めとられない「蕩尽」の概念の重要性に気づかせてくれるという。

一方、アメリカとカナダのスポーツ文化を論じる中で現代社会における「グローバル化」のスポーツにおける意味を考えさせてくれたのが、J. ハリス教授(米国)とR. グルノー教授(カナダ)であった。J. ハリス教授は、このテーマに関するアメリカ人の心性を「渦の中心にある安定性(不動性)」とい実に巧みな表現で示している。すなわち、とくに三大スポーツ(野球、アメリカン・フットボール、バスケットボール)に対するアメリカ人の異常なまでの自国中心主義的(ローカルの)な専心(固執)は、これらのスポーツがグローバル化されればされるほど、国家(ナショナルティ)全体としては奇妙なローカル化を際立たせていくのである。しかし、これもまた逆説的なことだが、アメリカ国内の本来のローカルティが、実は最もグローバル化に寛容であったことが大リーグのシアトル・マリナーズを日本の任天堂が買収する際に示されたというのである。

これに対して、R. グルノー教授は、コマースライゼーションやメディアライゼーションが必然的にグローバル化の中核をなさざるをえず、それらはさまざまな戦略の下にスペクタクル社会のアイデンティティを形成しているという。それは、歴史的には、市民社会におけるスポーツの公共性とボランタリズムの間隙を縫うように巧みに浸透し、そのイデオロギーをエージェント化(主体化)していくのである。ここでは、スペクタクル社会の構造の規定性をもっともラディカルに問いつつ、自国のスポーツ文化の特徴が展

開されたといえるであろう。

このように第2セッションでは、現代社会の変容をそれぞれの国の事情に照らし合わせながら「消費社会」と「グローバル化」という2つのキー・コンセプトによって結び付け、スポーツ文化のあり様を理論的に整理しつつ、自国におけるその自律的な展開過程が論じられたといえるだろう。ダニング教授と上杉教授のコメントも、上記の点を踏まえつつ、スポーツ文化のグローバル化とローカル化との関係やそれを分析する社会学的視点の有効性、あるいは新たな視点の可能性に焦点が当てられていた。

フロアからも活発な意見や質問が出されたが、最も印象深かったのは今回のこのような世界的なスポーツ文化の動きを議論する中で、学校体育や地域スポーツの問題とこれらを実践的に結びつけて考えようとする質問が出されたことであった。しかしながら、司会者の不手際もあり、フロアとパネラーの質疑応答の仲介を十分に果たすまでには至らず、議論を深めることができなかった。国際会議の常とはいえ、この場を借りてすべての参加者(会員)にお詫びを申し上げる次第である。(文責 菊 幸一)

・ワークショップ/セッション3  
「スポーツと権力」

このセッションは、市民領域の中に浮遊する文化、スポーツ文化を重層的に取り囲む、又はそこに内在するパワーの諸関係を見いだしていくことを課題とした。各パネラー、コメンテーターはそれぞれブリティッシュ・カルチュラル・スタディーズ(ヘゲモニー論)、ブルデュー、フーコーを基盤に研究を進めており、相互に方法論的立脚点をやや異にしながらも、パワーリレーションに研究を焦点づけている点に共通の重なりを持っている。

セッション3では、トムリンソン氏とドゥフランス氏により、市民領域の中のスポーツを取り囲むパワーリレーションについてのややマクロな視点からの切り込みと、他方、黄順姫氏、清水論氏、伊藤公雄氏による、ボディ・イメージと象徴権力、身体の権力技法、マスキュリニティの形成、という、主題別の切り込みが交差し、全体として現代社会における身体、スポーツ、レジャーに関わるパワーの多面的状況が浮き彫りになった。これに対しコメンテーターのアイヒベルグ氏は、「非常に異なる事例研究間の結合の機会が与えられた」としながらも、権力を見ていく際には国家、市場、市民社会に類別された三重の権力カテゴリーを設定する必要がある、スポーツの場における諸矛盾の理解は、これらの諸権力カテゴリーとの関連性のもとで行うことが必要であるとし、この観点よりそれぞれの報告を位置づけた。後日事務局への通信の中で、当日の参加者であった都立大学の榎本氏より、このような機械的なカテゴリーについての疑念が表明されたが、同様の観点から鋭く切り込んだのがもう一人のコメンテーターであった吉見俊哉氏であった。

氏のコメントを一言で述べるならば、「権力の重層性とは何か」という問いかけであったと司会者には思えた。この問いは、今日国家が権力の結節点としての位置を維持しながらもその比重が相対的に薄れ、権力が市民領域の中で極めて複合的なものとして現れてくる中では必須の見地であるように思える。

いずれにせよスポーツと権力をめぐる、世界的水準で見てもかなり高度で刺激的な議論が展開されたと言ってもよいであろう。一時間以上延長したとはいえ、個々の報告者、またフロアにとっても全く時間が不足した点、極めて心残りであった。

(文責 山下高行)

・公開シンポジウム  
「近代国民国家とスポーツ」

「近代国民国家の形成」と「スポーツ」をテーマに、内外の多くの研究者を集めてシンポジウムが行われました。内容の詳細については、今年度中に世界思想社から出版される予定です。(事務局)

一般発表/国際セッションの報告

【一般発表セッション1】

「福岡ユニバーシアードの研究(3) — ボランティアの参加意識 —」

白石義郎 (久留米大学)

白石氏は、巨大イベントとしての福岡ユニバーシアードについて調査研究を進めている中で、今回ボランティアの参加意識について発表された。氏は、巨大スポーツ・イベントにボランティアは何をもたらすのか。また、ボランティアはイベントを通じて何を感じ何を学んだらうかという問題意識を持って調査を組み立てている。ボランティアは日常生活とは違った社会空間での新奇な経験と出会いを求めて参加し、参加後の満足度が高かったことを報告している。その上で、満足を規定している要因を逆に不満が何であったかという方向から分析している。

一つは語学レベルの高いボランティアにおける業務上の責任のある配置がなされなかったこと。二つめに「指示」が一貫されていなかったこと。三つめに自由裁量のある仕事をさせてもらえなかったこととまとめ、巨大イベントにおけるボランティアの参加人数、専門職員の人数、公務員としてのシステムからくる限界からボランティアの限界点であると結論づけている。

また、興味ある事例として「カパー・クラブ」を取り上げている。このクラブはユニバーシアード宣伝のためのボランティアとして位置づけられていたが、そのボランティアのなかに「ボランティアを指揮するボランティアを養成する」といった理念から自己組織化しようと考えた人たちがでてきた。しかし、現実には一般ボランティアの募集と同時にこのクラブは解散させられたが、この事例から今後の巨大スポーツ・イベントのボランティア活動に対する「ボランティアの学習」といった新たな視点を提示している。

「北海道農村における地域-学校-スポーツ~北海道和寒町中和地区「夢気候21」の事例から~」

大沼義彦 (北海道大学教育学部)

大沼氏は、北海道和寒町中和地区のカヌークラブ「夢紀行21」の事例を通して変容する農村地域社会の中でスポーツ集団がいかなる意味合いを持ちながら成立し、活動が展開されてきたのかということに関係者への面接調査から明らかにしている。すなわち、「夢紀行21」というカヌークラブはPTAを母体に、学校教員の働きかけによって組織されたスポーツ集団であり、生活組織が弱体化する中で社会生活の基本構造を維持・補完、再編する機能を新たに形成された組織と捉え、スポーツを媒介にした新たな「共同性」を模索する動きと結論づけている。その上で「夢紀行21」が農村社会における「生活拡充集団」の一つと位置づけた。しかし、研究を支える理論的な枠組みがはっきりしていない

めに、面接調査で得られたデータの詳細な記述にとどまり研究の意図が曖昧になっているように思われた。

「ランニング愛好者の社会集団(ランナーグループ)の形成過程-ランニングサブカルチャー研究-」  
東方美奈子 (筑波大学大学院)

東方氏は、スポーツサブカルチャーが成立する一側面を分析するためにランニングサブカルチャーに注目している。前半ではライフストーリー分析を用いて6人のランナー(走る人)を対象にランニングへのコミットメント過程、ランナー(走る人)のアイデンティティや身体体験、ランニングの意味といった側面からランニングサブカルチャーにおけるランニングの意味を説明している。

特に、走る人(ランニングにコミットメントしている人)をレース出場、アディクション、走る理由、志向から「ジョガー」「ランナー」「レーサー」といった3つのタイプに分類し、ランニングサブカルチャーの担い手をランナーのみに位置づけ、そのランナーグループの形成過程を検討している。しかし、氏の言うランナーグループのみがランニングサブカルチャーを形成していると捉えてしまっているのか議論の余地がありそうである。それは、ランナーやランニングサブカルチャーといった用語の概念規定が曖昧なことから生じており、用語等の概念規定を整理されることによって研究内容が明確に伝わってくるのかもしれない。(文責 浅沼道成)

「身体障害者のスポーツ社会化研究-ある車椅子バスケットボールプレイヤーの個人史より-」  
藤田紀昭 (日本福祉大学)

藤田氏の研究は、これまであまり省みられることのなかった身障者のスポーツ社会化の過程を、個人史をたどりながら、個人の主体性、エージェント、社会化状況のコンテクスト、制度及び文化の概念によって分析しようとしたものであった。発表の内容は興味深く、示唆的なものであった。しかし、何か釈然としないものを感じた。個人史を追っているにもかかわらず、なぜ主体的な側面が十分に把握されなかったのか、なぜ社会化過程のパターンの一般化が問題になるのか、さらにいえば、なぜ研究対象として全日本車椅子バスケットボールプレイヤーを選ばなければならなかったのだろうか。これらを考えると、目的と方法の問題に突き当たる。

氏の研究は、社会化(過程)研究のための理論的視点と方法論が先行し、それに事例を当てはめる、つまり理論的枠組みと方法論の検討に傾斜していることが窺われるのである。従って、身障者のスポーツ活動やスポーツ社会化に関わる諸問題を前提としてあるいは背景としてもみることはできなかつたし、対象者の特有な性格も社会化過程も生き生きとしたリアリティをもって語られることはなかつた。結局、主体性を上げながらも、研究者の洞察(解釈)があまり働いていない、構造機能主義的理解に落ち着いていたようである。フロアからの質問もこうした疑問を反映していた。なお社会化過程における主体性把握の検討とともに、目的の明確化とそれに対応した方法という点において再考が必要であると思う。今後を期待したい。

「障害を持つ学生への大学一般体育の対応」

佐藤充宏 (徳島大学) / 高橋豪仁 (徳島文理大学) / 綿祐二 (東京都立大学)

佐藤氏らの研究は、大学における一般体育の質的転換が求められ、かつノーマリゼーションやバリアフリーの社会の形成が唱えられている今日、障害者の学習環境の整備の促

進という課題を認識しつつ、障害を持つ学生のための一般体育授業の実態と動向を調査し、同授業の持つ課題と意義を明らかにしようとしたものであった。OHPを使用した発表はわかりやすく、資料もよくまとめられていた。特に授業経営に関する重要事項、また一般教養としての体育の独自性(専門性)は、単に自立というだけでなく、スポーツを含めたライフスタイルの確立とできることの体感にあるという指摘、さらに成功したものとして提示された個々の事例は関係者にとって大変有益である。しかし、当研究の重要性を考慮しても、当学会での発表ということについては、疑問の残るところである。

(文責 中山正吉)

#### 【一般発表セクション2】

##### 「近代スポーツにおける〈反-近代〉の諸相」

野崎武司(香川大学)

野崎の発表は近代スポーツが孕んでいる〈反-近代〉の特質を探ることがスポーツの本質的価値を探ることになるという認識のもとで、大澤真幸の命題である〈求心化-遠心化〉作用という身体の志向性が織りなすコミュニケーションである間身体的連鎖の中で、スポーツ経験者たちが体験する、意識による身体操作が消失した極限状況でおこる神秘体験としての直接的コミュニケーション(身体の共鳴)ともいべき神懸かり的プレーに着目する。そしてそれを成立させるのが、場とリズムの共有を核とする継続的で反復的で濃密な閉鎖的な修練であることを指摘し、それが創造的な働きを担うとともに、反動的なイデオロギーへと向かう危険性もあわせ持っていることも提起した。

##### 「スポーツにおける「興奮の探求」と「文明化の過程」」

坂なつこ(立命館大学大学院)

坂の研究は、ノルベルト・エリアスの社会学理論の歴史モデルを提示した『文明化の過程』と、そのモデルによって具体的事象であるスポーツを読み解こうとした『スポーツの文明化-興奮の探求』の2つの著作に依拠してスポーツ研究の可能性を検討したものである。エリアスは「フィギュレーション」や「編み合わせ」といった概念を用いて、人間関係の相互依存の網の目が複雑で長大になる「文明化の過程」において、「肉体の行使が重要な役割を果たす特殊な娯楽の形態」であるスポーツが、「模倣的な戦い」としてイギリスで最初に公認されて発展し、世界中に広がるに至った社会の関係構造の変化や過程、ダイナミクスを探ることによる、余暇研究やスポーツの発生論的研究の可能性を示している。特に坂は、スポーツ研究における「社会という場の全体」の変化の総体を捉えることの重要性を強調している。

これらの発表に対して、どちらの研究発表に対しても許された時間一杯の活発な質疑がなされた。まず、野崎に対しては東洋的身体論と関わっての質問や、近代化そのものであるスポーツの成り立ちから近代を超える契機をどのように捉えるかなど興味深い意見が出された。また、坂には、フィギュレーションの概念と訳語や労働としてのレジヤーについての質問などがなされた。共に新進研究者による、スポーツ社会学研究のファンダメンタルな方向性を探る意欲的な研究であり、今後の更なる展開を期待したい。

(文責 濱口義信)

##### 「スポーツにおける中間集団の形成-身体の両義性とスポーツ体験の身体性・遊戯性」

松田恵示(大手前女子大)/島崎 仁(大阪教育大学)

まず「スポーツ社会学における1つの主題としての身体」を、歴史的・社会的性格をもつものとして捉え、その可能性を「遊戯」「身体」「教育」が近代社会の中で接合され、変容していく過程の論究の必要性や可能性の中に論じ、次に、「身体両義性としての「身体性・遊戯性」」について、身体認識の主体性と客体性を踏まえた上で、求心/遠心、能動/受動、間接/直接、意識/運動といった多様な二重性の観点から捉え、最後に「共同体の「身体性」とスポーツにおける中間集団の形成」について、現代社会における「face to face」的共同体の再評価、中間集団の両義性と共同体の「身体性」、さらに、スポーツにおける中間集団の形成などの視点から述べた。

---スポーツ社会学での身体そのものを考えていく上での、基本的な枠組みを試論的に提示したのものとして今後の展開を期待したい。論を展開する上での用語が一般的理解を得るにはやや難解ではないかという指摘があった。

##### 「ピエール・ブルデューの「ディスタクシオン」論とスポーツ研究の可能性」

棚山 研(立命館大学大学院)

ブルデューの「文化資本」と「ディスタクシオン」の概念の考察をしながら、スポーツの「場」に関連づけて論を展開した。まず、文化資本論が組み立てられていくまでの研究の概要を紹介し、文化的実践が固有の再生産のシステムをもっていることを明らかにし、文化資本論をの立場を明確にしている。そして、彼の「場」「象徴闘争」の概念を用いて卓越化の基本形としての「上流性」について述べ、その卓越性の種差的多様化について、スポーツの「場」をひきあいに出しながら、ブルデューの考え方の援用可能性について論じている。

---1992年スポーツ社会学学会設立時での田原音和氏の記念講演をも契機に、ブルデュー理論のそのものへの関心や、スポーツへの場への援用の試みが行われてきているが、この発表は、ブルデューの基本的理解をするには、発表資料も豊富で好都合であった。その積み重ねの基礎的枠組みという観点からの貴重な試みであり、今後の発展を期待したい。

##### 「日本のサッカーに見られるナショナル・アイデンティティの創造」

高橋義雄(東京大学大学院教育学研究科)

ナショナルチームが対戦する国際競技では、ナショナル・アイデンティティが喚起されるという予測のもとに、日本サッカー協会関係者がW杯招致活動を通して「日本人」としてのナショナル・アイデンティティの再認識とそのアピールしていった活動を通し、また、未公開の資料の検討、関係者インタビューなどを通して、新しく創造されていくナショナル・アイデンティティについて論じている。特に、未公開の開催提案書に用いられている多様なエスニックマーカを用いながらの「顔の見えない日本」の解消に役立てようとする姿勢や、過去と現在の連続性が強調された形で創造されていることが述べられ、また、協同開催にあたり、在日韓国朝鮮人社会との関わりなどについての今後の研究の方向性を示唆している。

---緻密な論理構成と貴重な資料をもとにしての発表内容には説得力があり、また、「ナショナル・アイデンティティの創造」という表現自体も魅力的である。日本が単一民

族国家であるかのような「ナショナル・アイデンティティ創造」の問題や、「日本民族国家」「日本国家」の相違の観点など興味深い指摘が今後の研究でさらに豊かに展開されていくことが期待される。(文責 沢田和明)

#### 【国際セッション/セッション1】

国際セッション一般発表のSection 1では、Hiroki Wakabayashi氏の「Ice Hockey in the Era of Globalization: Developing Free Sports Talents Market and the Changing Significance of International Competitions」、Soo-Ho Jung氏の「A Study of Sociological Application of Sustainable Development Theory to Leisure and Sports」、Dag Leonardsen氏の「The Olympic in Lillehammer: The Adjustment of a Mega-Event to a Local Culture. Or: From Technocratic Fathering, Vis Anomic Pregnancy, to Popular Enjoyment」、Tetsuya Matsuo, Takeshi Yoshida and Yuichi Taniguchi氏の「Cross-National Comparative Study on Sports Value-Oriented in Athletes」、Kye-Hee Hong氏の「Participation to Sport for All and Mental Health: Life Satisfaction of the Aged?」の計5本の報告がありました。

若林氏(日本;筑波大学大学院)の報告(邦題は「アイスホッケーのグローバルゼーションスポーツタレント市場の自由化と国際競技会の意味の変化」)は、スポーツタレント市場のグローバルゼーションの現状とその特徴に注目し、NHL(National Hockey League)における外国人プレーヤーの増加傾向、また国際競技会の意味がグローバルゼーションの時代においてどのように変化するか分析・検討を試みられました。

氏はデータを示しながら、外国人プレーヤー増加の背景には、国際状況の変化やフランチャイズ都市の社会的環境の変化があると指摘されました。また、このような状況の変化に伴って、国際的競技会が脚光を浴びる一方で、ナショナル・アイデンティティ確認の儀式としての機能は薄れてきているとの見方も示されました。

鄭氏(韓国;筑波大学大学院)の報告(邦題は「レジャー・スポーツと『持続可能な開発』への社会的接近」)は、レジャー・スポーツ化する農山村における地域の活性化とレジャー・スポーツの共存を考える際に、「持続可能なツーリズム」(Sustainable tourism)の可能性を探ることを主たる目的としていました。

氏は従来のスポーツ・レジャー開発を批判的に分析・検討し、持続可能なツーリズムに基づく実践が、新しいタイプのレジャー・スポーツシステムの構築に有効な示唆を与えるとの見解を示されました。

松尾氏(日本;福岡大学)らの報告は、スポーツにおける価値意識について、日本の特殊性と、国家間の差異を分析し、スポーツキャリアの形成過程やスポーツ体制、さらには社会・文化システムとの関連性について検討しようとするものでした。クロスカルチュラルな比較調査で、ユニバーシアード福岡大会(1995年)の参加者に対して行われたサーベイの結果をもとに報告されました。

Leonardsen氏(ノルウェー;オプラント・カレッジ)の報告は、リレハメル・オリンピックの前及び期間中に起きた事例を紹介しながら、オリンピック開催を契機に急速な社会変化に地域社会がどう対応したかを紹介したものでした。

氏はこの期間を、Technocratic fathering, Anomic pregnancy, Popular enjoymentに分類し、住民の間での社会統合の効果や、ローカル・アイデンティティ形成の過程について解説を試みられました。

Hong氏は、精神衛生面でスポーツ参加がどのような効果を上げているのかに注目し、韓

国における高齢者を対象に、聞き取り調査を行った結果を報告されました。

氏は、スポーツへの直接参加の意欲や、マスコミなどを通してのスポーツへの関心は高齢者の間で比較的強く、しかも生活への満足度との間には相関関係が存在することが明らかになったと報告されました。

本セッションでは実質2時間の間に5名が報告と質疑応答を行いました。また、英語を使用したため、質問者とのコミュニケーションに手間取ったりしました。このため、海外の報告者の貴重な報告や、国内の方の実証的できめ細かい報告など、バリエーションに富んだ興味深い報告を聴くよい機会であったにもかかわらず、もう一歩掘り下げた論議ができなかったような気がします。司会者として、報告をされた方や聴きにいられた方に申し訳なく思っています。(文責 平井肇)

#### 【国際セッション/セッション2】

この国際セッションIIは大会開催日のぎりぎりまで発表者が決定せず、事務局と座長を直前までやきもきさせたセッションであった。そんな中で口火を切ったのは、本セッションでは唯一の日本人演者、海老島氏であった。氏は、アイルランドの伝統スポーツであるゲーリック・フットボールやハーリングなどを統括してきたGaelic Athletic Association(G.A.A.)を取り上げて、スポーツ組織としてはきわめてユニークな役割と機能を果たしてきた様子を「アイルランドにおける文化的エンティティとしてのスポーツ」と題して報告した。M. コーザックによって創設されたG.A.A.は純粋なスポーツ組織であった。この組織がアイルランドの社会状況に対応するかたちで、徐々に政治的色彩を帯びてくる。氏はこのような役割は、組織の規約改正によって巧妙に遂行されていったものであるとする。具体的には、G.A.A.の入会金を安くして人を集め、そこで数々のイギリス型スポーツの禁止を唱えたりしながら、独立運動のモラル高揚に利用していくプロセスが述べられた。スポーツが基本的には無色透明でかつ、魅力に満ちたものであるが故に価値観や政治意識の異なる人々を統合するのに都合がよかった。また、これはスポーツが政治活動家によって暗黙裡に操作された典型的な事例であるとした。

マスメディアの発展した近年においては、イギリス型のスポーツで強くなることのある意味で国際的にアイルランドが認知される近道であるとも考えられるのに、最近まで敢えてこのような戦略を取らざるを得なかったのは何故なのか、そしてそれは政治的なパワーの所為なのか、あるいは氏がタイトルにまでまつりあげた「文化」的パワーのなせる業なのか、はたまた経済的パワーの影響はどうなのか、今後の成果に期待したい。

2番目に報告したのは、長い間、日本の大学ラグビーチームに参加、コーチしてきたオーストラリア人のR.ライト氏であった。氏は「日本の大学ラグビーにおけるプレイの文化的分析」と題して、比較文化的研究の報告をした。氏によれば、ラグビーもフォーマルなルールによって構造的に規定されているけれども、チーム、宗教、国、そして北半球・南半球でそのプレイの様式に違いがあるとする。具体的には、1996年の全国大学ラグビー選手権のビデオを分析することによって日本の特徴を導き出している。特に、ラグビーの身体が文化をいかに反映・表現しているか、プレースタイルの違い、男らしさのヘゲモニーと支配的文化の構築等について検証してみせた。そして、武士道から生じた「精神力」は、ビクトリア・エドワード期の男らしさの理念と似ている。また、ファウルの数やその形態において日本のラグビーは独特なあり方を保持している、といったことがユニークな分析結果として報告された。スポーツの表現のされ方、あるいはスポーツの身体の使い方から特定の男らしさや男性ヘゲモニーを検証してゆくとともに本研究のオリジナリティが見いだされた。

3番目は「スポーツ集団における構造的要因とチームの成功」と題した韓国スポーツ科学研究所のハン・キュウ・リー氏の報告であった。氏は持ち時間の大半を自らの過去の業績の報告に費やし、肝心の本題に入ったのは残り時間が2～3分となったところであった。したがって、フロアーにいた聴衆は研究の中身についてはほとんど説明を受けることができずに終わってしまった。レジュメによれば、チームの成功に対して構造的要因がどれほど影響するのかということ、韓国の高等学校ホッケー選手に対して行った統計的調査（因子分析）によって明らかにしようとしたものである。個人的見解であるが、「構造とは何か」という概念規定を始め、調査対象のサンプリング方法、有効な因子の選定方法等、この種の研究においてありがちな欠点をクリアーしていたとは思えなかった。また、当然のことながら本研究発表以外の話は別のところすべきであった。

4番目はブン・フン・ジョー氏とジュン・フン・リン氏による「韓国における重要日刊新聞のスポーツ記事分析」である。氏の研究は韓国の日刊新聞「朝鮮日報」のスポーツ記事について、占有面積率、内容、月別・季節別・種目別記事量について計測し、あるべき姿を模索するというきわめて規範的な研究であった。結果から、氏は、Hスポーツ記事には指導的役割を果たすような記事が少なすぎる、特定の人気種目に偏った報道姿勢は是正されるべき、等の見解を報告した。韓国における新聞ジャーナリズムも、基本的には我が国のそれとあまり変わらないものであることが残念に思えた。

最後は、こちらも韓国のフェン・ジュ・ユン氏とユーン・カン氏による「スポーツ集団と軍隊の関係性のための研究」であった。そこでは、社会学的見地からみて、スポーツ集団は軍隊と共通する性格を持っている、具体的には、権威主義、保守性、形式主義、閉鎖性、凝集性、完璧主義、ルールによって許可された暴力、不確定性などである。また、健康維持、体力増強、精神力の増強、軍隊における情緒的純化、軍隊における統率、有効な社会化とリーダーシップなど、軍隊におけるスポーツの機能と役割の重要性を報告した。ある程度は想像されたことであるが、北朝鮮と接する韓国における軍隊の意味と重要性について、改めて考えさせられた。

当セッションは始めの2題については、ヨーロッパ各国の学者を始め多くの聴衆がおり、質問・意見も面白いものが多く、活性化したのであるが、韓国の人の発表に入ったとたん多くの人が退席し、残ったのは数名の日本人と韓国の発表関係者だけであったのは残念であったし、何を意味しているのかを今一度問う必要があるように思われる。

(文責 橋本純一)

編集委員会からのお知らせ

<重要>

投稿のご案内

会員各位

編集委員会から下記の要領で論文等の投稿のご案内をいたします。

- 1) 締切：本年8月25日 消印有効。
- 2) 投稿の宛先：別記の編集委員会事務局まで。
- 3) ご留意下さい：
  - 1) 投稿部門、枚数、提出部数、論文等の記載要領などは『スポーツ社会学研究』巻末の投稿規定を参照下さい。

2) 投稿部門は基本として「論文」「研究ノート」です。編集委員会は投稿会員の選択した投稿部門にもとづき査読の作業をさせていただきます。

4) その他：

- 1) 今後は掲載決定と同時に編集委員会印をもって証明書を発行します。業績報告など必要な場合にご利用下さい。
- 2) 紙面確保の上で必要なので、論文等を投稿なさる会員は、次の要領であらかじめ投稿希望をご通知下さい。

方法：はがき、または E-mail。

期日：本年7月15日

3) 掲載決定論文等の「FDによる入稿」については前年同様です。

本年度編集委員会の組織  
本年度の編集委員と事務局のご案内

- 1) 本年度編集委員会はつぎの会員によって組織します(50音順)。  
生沼芳弘、北村 薫、清水 諭、杉本厚夫、萩原美代子、平野秀秋、宮内孝知、森川貞夫
- 2) 編集委員会事務局は下記です。論文投稿や登録等の際はこの場所をお願いします。

〒194-02 町田市相原町4342

法政大学社会学部

平野秀秋

E-mail : hhirano@mt.tama.hosei.ac.jp

電話 : 0427-83-2434 (研究室直通)

FAX : 0427-83-2370 (事務課経由)

研究誌購読に関するお願い  
『スポーツ社会学研究』の市販にともない、第1年度は115部の販売実績がありました。

しかし、会員数や図書館数などと比較すると、まだ販売数増加の余地が大きいと考えられます。当学会誌『スポーツ社会学研究』の社会的評価を高めるため、ぜひ下記の2点につき引き続き会員諸氏のご尽力をいただきたく存じます。

- 1) 所属大学・研究機関の図書館へ定期購読をご請求下さい。
- 2) 都道府県・市町村立図書館へ在住市民として定期購読をご請求下さい。

その際ご利用いただけるよう、つぎに書誌情報を掲載します。

表題：『スポーツ社会学研究』

ISSN 0919-2751

発行者：日本スポーツ社会学会

発売所：法政大学出版局

価格：1900円(税別)





1) 研究委員会の開催

- 第1回 1996年5月19日
- 第2回 同年6月30日
- 第3回 同年7月28日
- 第4回 同年9月21日
- 第5回 同年10月20日
- 第6回 同年11月17日 (兼第1回国際シンポジウム実行委員会)
- 第7回 同年12月8日 (兼第2回国際シンポジウム実行委員会)
- 第8回 1997年1月17日 (兼第3回国際シンポジウム実行委員会)
- 第9回 同年2月2日 (兼第4回国際シンポジウム実行委員会)
- 第10回 同年2月28日 (兼第5回国際シンポジウム実行委員会)
- 第11回 同年3月10日 (兼第6回国際シンポジウム実行委員会)

2) 日本スポーツ社会学会第6回大会国際シンポジウムの開催 (予定)

3) 日本スポーツ社会学会第6回大会国際シンポジウムの出版に関する予備折衝 (世界思想社)

d. 事務局報告

1) 活動報告

会報14号～16号の発行

2) 事業計画

会報17号～19号の発行

2. 審議事項

a. 平成8年度編集委員会決算報告

平野編集委員長より平成8年度の編集委員会決算報告がなされ、承認された。  
(別紙資料1参照)

b. 平成8年度決算報告

吉田会計担当より平成8年度の決算報告がなされた。続いて監査報告がなされ、これを了承した。(別紙資料2参照)

c. 平成9年度予算案

吉田会計担当より平成9年度の決算が示され、審議の結果、これを了承した。  
(別紙資料3参照)

d. 役員選挙結果の取り扱いについて

種々意見交換の後、審議の結果、被選挙権を持たずに選出された3名のみ補充選挙を行うことを理事会原案として次期理事会に申し送り、総会に諮ることとした。

e. 第7回大会の開催地について

神戸大学での開催を承認した。

第IV期 第1回理事会報告

日時：1997年3月26日 (於 立命館大学末川記念館)

参加理事：井上俊、江刺正吾、宮内孝知、平野秀秋、山下高行、菊幸一、杉本厚夫、  
リー・トンプソン、山口泰雄、

議題：第IV期理事会の役割担当について

1. 欠員3名の取り扱いが不明確な段階であるので、会長、理事長、編集委員長、事務局のみを以下のような原案として決定した。

会長…井上俊

理事長…宮内孝知

編集委員長…平野秀秋

事務局…江刺正吾、菊幸一 (奈良女子大学に置く)

2. 事務局の変更については2期4年が慣例になっているが、昨期早々当初の事務局長が急逝されたことや庶務担当者の長期海外出張等が重なったため、急きよ奈良女子大学に移転することとなった。

3. 他の詳細な役割分担や監事の選出は、総会で新理事会への一任を取り付け、後に書面会議で結論を出すこととした。

第IV期 臨時理事会 (書面会議) 報告

1997年5月20日

議題：第IV期理事の役割分担

・5月20日より末日にかけての書面会議により、以下のような新理事の役割分担が決定した。

会長：井上俊

理事長：宮内孝知

事務局：江刺正吾 (局長)、菊幸一

研究委員長：森川貞夫

研究委員：山口泰雄、亀山佳明、山下高行

編集委員長：平野秀秋

編集委員：杉本厚夫、森川貞夫 (兼任)、宮内孝知 (兼任)

国際交流委員：佐伯聰夫、リー・トンプソン、小椋博

監事：清野正義、今村浩明

総会報告

第6回日本スポーツ社会学会総会報告

平成9年3月26日 於 立命館大学

進行 (理事長)

1. 会長挨拶

2. 議長の選出… (正) 杉本厚夫、 (副) 小椋博

3. 議事

a. 平成8年度事業及び収支決算報告 (資料2参照)

事務局担当吉田氏の説明の後、これを承認した。

b. 平成9～10年度役員を選出

1) 新理事の選挙結果

欠員3名の再選挙という理事会案に対して、種々意見交換の後、補充選挙なしで繰上げ当選もなしという修正動議が出され、これを承認した。また、次年度総会

までに規約の改正を含めた理事定員の見直しを検討し、審議することとした。

2) 会長の選出

原案通り、井上俊氏を承認した。ただし、その他の役員を含め、あまり役員を固定化しないような方向で配慮するよう意見が出され了承した。

3) 監事の選出

理事会に一任することが承認された。

4) 事務局の移転

九州大学から奈良女子大学へ移転することが承認された。

c. 平成9年度事業計画及び収支予算案 (資料3参照)

事務局担当吉田氏の説明の後、これを承認した。

d. その他

次期学会大会開催校を神戸大学とすることを承認した。

4. 新会長、新理事長の挨拶

5. 閉会

平成8年度決算

(資料2)

平成8年度予算書  
1:収入の部 1,544,814 円  
2:支出の部 1,544,814 円  
3:差引残高 0 円

1 収入の部  
項目 金額 備考  
繰越金 324,814 前年度繰越金  
会費 1,100,000  
その他 120,000 広告費他  
合計 1,544,814

2 支出の部  
項目 金額 備考  
機関誌関係 700,000 印刷代、編集費  
会費関係 120,000 印刷代  
通信事務費 200,000 切手、業務、郵送費(会報他)  
理事会経費 220,000 交通費補助、研究プロジェクト経費  
事務局作業補助 80,000 作業手伝い、事務用品他  
学会大会補助 50,000 第6回大会事務局への補助  
その他 50,000 名簿印刷代、振込手数料他  
予備費 124,814  
合計 1,544,814

平成8年度決算書(2月28日決算)  
1:収入の部 1,579,149 円  
2:支出の部 1,448,579 円  
3:差引残高 130,570 円

1 収入の部  
項目 金額 備考  
繰越金 324,814 前年度繰越金  
会費 1,139,000 2/28期E-登録2334件E8増額1066  
機関誌売上 21,880 第2巻、第3巻について  
広告費 90,000 協賛会員年度会費(3期×3E)  
雑収入 3,455 預金利息等  
合計 1,579,149

2 支出の部  
項目 金額 備考  
機関誌関係 700,000 印刷代、編集費  
会費関係 103,669 印刷代  
通信事務費 282,190 郵送費(1113-15,16,17)  
理事会経費 196,340 交通費補助、研究プロジェクト経費等  
事務局作業補助 69,038 作業手伝い、事務用品他  
学会大会補助 50,000 第6回大会事務局への補助  
その他 47,342 名簿印刷代、振込手数料他  
合計 1,448,579

(資料3)

平成9年度予算書

1 収入の部  
項目 金額 備考  
繰越金 130,570 前年度繰越金  
会費 1,250,000 正・学生・賛助会費  
その他 110,000 広告費、機関誌売上費他  
合計 1,490,570

2 支出の部  
項目 金額 備考  
機関誌関係 700,000 印刷費、編集費  
会費関係 120,000 17~19号印刷費  
通信事務費 260,000 16-18号印刷費、郵送費  
理事会経費 220,000 交通費補助、研究プロジェクト経費  
事務局作業補助 100,000 印刷費、送料、雑費  
学会大会補助 50,000 第7回大会事務局への補助  
その他 15,000 振込手数料他  
予備費 25,570  
合計 1,490,570

上記の決算書と監査の結果  
適正に処理されていることを認めます。  
平成9年3月8日 監 査 人 近藤 義 弘

(資料1)

SSSSSSSSSSSSSSSSSSSS 決算報告 SSSSSSSSSSSSSSSSSSSSS

編集委員会会計報告

(平成7年度分) <平成8年度分>  
(収入の部)  
繰越金 123,616 6,919  
予算 700,000 700,000  
小計 823,616 706,919  
(支出の部)  
印刷費 714,976 615,335  
会議費 6,674 6,000  
通信費 27,700 17,200  
交通費 66,080 62,780  
事務費 1,267 9,373  
支出計 816,697 710,688  
次年度への繰越 6,919 Δ3,769

図書紹介

『山村の開発と環境保全ーレジャー・スポーツ化する中山間地の課題ー』  
(松村和則編著 南窓社 1997年 A5判上製 380頁 予価3700円)

環境問題への社会学的研究は、1970年代初頭飯島伸子の公害研究から出発し、新幹線騒音問題、原子力問題への取り組みなど近年漸くその力を蓄えてきています。しかし、「問題」として発現しない日常生活の中にも「環境問題」は潜んでいるのです。とくに、国民の健康増進へ大きく貢献すると考えられてきたスポーツ・レジャーがその原因となる点には、まだ大方の理解は得られていません。また、環境問題を生起させる「構造」のみならず、人々の日々の生活実践がそれを支えるという視点を持たないとこの問題の解決の糸口すらつかめないのです。

以下にみるような様々な領域の研究者が集まりましたが、日常生活の「実在感」が研究の礎になるという点で共通認識を持っています。また、「東北」という地域に拘って日本の山村の有り様をみているという点でもユニークな本だと思います。

はじめに 松村和則 (筑波大学/スポーツ社会学)

第I部 開発政策と変貌する農山村

第1章 東北地方の戦後開発史と中山間地域問題 工藤昭彦 (東北大学/農業経済学)

第2章 スキー場開発の展開と土地所有 土屋俊幸 (岩手大学/林業経済学)  
ー「共同体土地所有」の意味ー

第3章 山村の衰退と住民の対応 松岡昌則 (秋田大学/農村社会学)  
ー秋田県北秋田郡阿仁町の事例ー

第II部 会津地方のレジャー・スポーツ開発と地域の対応

第1章 福島県の構造と地域政策の展開 佐藤和明 (石巻専修大/農村社会学)

第2章 磐梯山周辺地域のレジャー開発と「環境問題」 松村和則・佐藤和明

第3章 裏磐梯の集落展開と観光開発 佐藤和明

第4章 レジャー開発への山村住民の対応と「身体性」 松村和明  
ー檜原湖北岸早稲沢集落の事例を中心としてー

第5章 レジャー開発による湖水漁業の変容と環境問題 佐藤和明

第6章 「文化資本」としてのスキーと「地域の教育力」 甲斐建人(愛教大/体育社会学)  
ー福島県南会津郡檜枝岐村の事例ー

第7章 集落保全と観光開発 榊瀧俊子 (淑徳大学/産業社会学)

第III部 現代山村問題と環境保全へのパースペクティブ

第1章 「過剰」なる現代社会とスポーツ・身体へのパースペクティブ 松村和則

第2章 持続可能なツーリズムの理論的展開 鄭守皓(筑波大・院/スポーツ社会学)

第3章 山岳地域における農業・自然保護 市田知子(農業総合研究所/農業社会学)  
・レジャーードイツ・バイエルン州を事例としてー

第4章 「文化資本」としてのスポーツの山村的意味 松村和則・甲斐建人  
ー「地域の教育力」論を経由してー

第5章 リゾート開発運動の展開とその論理 土屋俊幸

第6章 山村開発における「実践感覚」と環境保全への視角 松村和則  
あとがき

(松村和則)

・【スポーツファンの社会学】

(杉本厚夫編著 世界思想社 1997年)

この度、世界思想社より「スポーツファンの社会学」(1,950円)を出版いたしました。本書は、見るスポーツに熱狂する人達、つまり、スポーツファンの行動に焦点を当て、それを社会学の視点から読み解いてみようと思いました。これまで、スポーツファンがそのスポーツの魅力について書いた書物は多くありますが、スポーツファンそのものについて書かれたものは皆無であります。その点に本書のユニークさがあるのではないかと  
思っております。

また、「人々はなぜスポーツに熱狂するのか」を基本的なテーマとして、社会、文化の視座から多角的に分析しております。スポーツとファンを結びつけるさまざまなメディアの仕掛けが、ここでは明らかにされます。さらに、本書では、これからのスポーツファンの行方についても、各章で扱っています。単なる現状分析に終わることなくそこから導き出されるこれからの姿について語っていることも特徴です。これらのことを通して、近代スポーツが持つ問題点を照射できればという欲張った企画であります。皆様からの忌憚ないご意見、ご批評、ご指導賜りたく、ご案内申し上げる次第であります。

第1部 つくられるスポーツファン

- 第1章 スポーツファンの興奮と鎮静 杉本厚夫 (京都教育大学)
- 第2章 スポーツファンのアイデンティティ 平井 肇 (滋賀大学)
- 第3章 つくられるスポーツファン 永井良和 (関西大学)
- 第4章 見るスポーツと教育 澤田和明 (滋賀大学)

第2部 スポーツファンの文化

- 第5章 スポーツファンと賭け 嶋 香織
- 第6章 スポーツファンにみるジェンダー 木佐貫久代 (奈良女子大学・院)
- 江刺正吾 (奈良女子大学)
- 第7章 プロ・スポーツのファンサービス 谷口輝世子 (デイリースポーツ)
- 第8章 スポーツファンの消費行動 原田宗彦 (大阪体育大学)

第3部 スポーツファンの身体的コミュニケーション

- 第9章 スポーツファンの一体感 谷口雅子 (奈良女子大学・院)
- 第10章 スポーツのファン体験と共同体の身体性 松田恵示 (大手前女子大学)
- 第11章 メディアとスポーツファン 小椋 博 (香川大学)
- 第12章 スポーツファンの暴力 菊 幸一 (奈良女子大学)

(杉本厚夫)

・【スポーツ文化と教育 人間とスポーツの新たな関わりを求めて】

(松田恵示・松田雅彦・島崎 仁・坪田信道共編 学術図書出版社 1977年)

「モノの豊かさ」をめざした工業化社会に対して、「心の豊かさ」を求めるポスト工業化社会への転換が言われて久しい。そこでは、未来のために今を犠牲にする旧来の志向と対比的に、今を楽しむ志向を重視した余暇社会の到来が予見されてきた。ところが、「遊び」と「仕事社会からの反動=墮落」も区別できない、あまりにも図式的な了解にそれが傾いたため、むしろ事態はより深い本質的な困難さに直面させられている。昨今の特徴的な社会問題を通して漫然と感じられている「社会の均質化」や「人間関係の希薄さ」は、本来ポスト工業化社会において克服されるはずの課題であったのではなかったろうか。

「モノの豊かさ」と「心の豊かさ」は、実のところコインの裏表であって、分離不可能な人間存在の2側面でしかない。むしろ問題は、そのような宿命的に矛盾を含む人間社会の方向を、「モノの豊かさ」のみに、あるいは「心の豊かさ」のみに二者択一的に固定しようとするわたしたちの感性にこそあったのではないか。このような立場から人間と社会のあり方をを見通そうとしたとき、今探られなければならない課題は、モノの心の、未来と今の、そして仕事と遊びの接点域に在るのであり、こうした矛盾する方向を抱えたまま人生と社会を豊かに構成する、「まじめ」と「非まじめ」の、「実利的指向」を「非実利的指向」の調停策なのである。語源的に遊びと同義であるスポーツを考えることが、このような課題を克服するための総合的、学際的な知の営みの1つとして現代に意義をもつ理由が、このあたりに認められよう。

本書は、このような総合的、学際的な領域として、スポーツを人文、社会科学的見地から読み解くことのための、基本的な考え方と探究の手がかりを提供することを、第一の目的としています。皆様方からの忌憚のないご意見、ご批判等いただけましたら幸いです。

第1部 人間にとってのスポーツの意味・価値の理解

- 第1章 ホモ・ルーデンスとしての人間とプレイ・スポーツ・文化 島崎 仁 (大阪教育大学)
- 第2章 人間にとってのスポーツの意味・価値とスポーツ教育 島崎 仁
- 第3章 実証データからみる人間にとってのスポーツの意味・価値 赤松喜久 (大阪教育大学)
- 第4章 身体性とプレイ・スポーツ 松田恵示 (大手前女子大学)

第2部 変化する社会・文化状況のなかのスポーツ

- 第1章 変わる生活社会---都市化---とスポーツ 松田雅彦(大教大附属平野高)
- 第2章 情報化の進むメディアの社会とスポーツ--- 松田恵示
- 第3章 国際化の中のスポーツ---強まる伝統志向--- 楠本康子(府立箕面養護学校)
- 第4章 「性」と「生」の視座からみたスポーツ 松田 恵示
- 第5章 スポーツとエコロジー 久保田豊司(大阪国際女子大学)
- 永松昌樹 (大阪教育大学)
- 生田泰志 (大阪教育大学)
- 赤松 喜久

第6章 スポーツの社会的制度や組織  
---スポーツ行政、指導体制---

第3部 スポーツ教育をめぐる諸問題

- 第1章 生涯学習(教育)としての生涯スポーツ 坪田信道 (高知大学)
- 学校外社会のスポーツをめぐる---

- 第2章 地域社会とスポーツ---地域と学校の連携---
  - 第3章 学習指導要領を通して見た体育の変遷---
  - 第4章 新しい体育授業の創造  
---小学校と中学校における新しい取り組み---
  - 第5章 学校化されたスポーツ  
---学校体育からスポーツ教育へ---
- 話の広場

田中聡(神戸市立高津橋小)  
北川 隆 (京都女子大学)  
田中 聡  
西尾 隆 (伊丹市立南中)  
松田 雅彦

樋口正美(伊丹市立荒牧中)

(松田恵示)

掲示板

・国際スポーツ社会学会 (ISSA) のジョージ・セイジ会長から、日本スポーツ社会学会会員に対して、国際スポーツ社会学会への入会を勧める文書がきています。1977年度会費は『国際スポーツ社会学評論』(IRSS、季刊)の代金込みでUS\$50です。入会申込書等は事務局にありますので、ご希望の方はご連絡ください。

ISSA/AISS

The International Sociology of Sport Association (ISSA) / Association Internationale de Sociologie du Sport (AISS) invites you to become a member or to renew your 1997 membership.

Renew before January 31st 1997 and receive a full address list of members - absolutely free!

The ISSA comprises an active body of scholars who study sport from the perspectives of sociology, social psychology, anthropology, history and political economy. The objectives of the ISSA include:

- fostering research in the social scientific study of sport
- encouraging international communication among scholars
- promoting collaborative cross-national research projects
- developing scholarly exchange through:
  - publication of IRSS
  - by sponsoring annual symposia
  - by promoting communication with other national and international sport-related organizations

- All members receive:
- IRSS (4 issues per year)
  - ISSA Bulletin (2 issues per year)
  - information on ISSA symposia and publications

Three types of membership are available:

- Regular Membership
- Special Membership (for students and others not in full-time regular employment - status to be determined by the General Secretary)
- Institutional Membership (for departments, colleges, universities, libraries and sport-related organizations or institutes)

See Order Form opposite for rates.

The International Sociology of Sport Association (ISSA) / Association Internationale de Sociologie du Sport (AISS) is an affiliated member of International Sociological Association (ISA) and the International Council for Sport Science and Physical Education (ICSSPE) UNESCO.

For more information please contact:

Dr Joseph Maguire (President)  
Department of Sport Science  
Loughborough University  
Loughborough LE11 3TU, UK  
Phone: +44 (0) 1509 223328  
Fax: +44 (0) 1509 231776  
j.m.guir@lboro.ac.uk

Dr Bert Vanrossel (Gen Secretary)  
Faculteit L.O. & Kine  
K.U. Leuven  
Tervurenvenue 101  
B-3000 Leuven, Belgium  
Phone: 31 31 35 90 00  
Fax: 31 31 35 91 96  
Bert.Vanrossel@ok.kuleuven.ac.be

Now Published by SAGE - ISSA Members Get IRSS Free!

The main purpose of IRSS is to disseminate research and scholarship on sport throughout the international academic community. The journal publishes standard research papers, research notes, book reviews and audiovisual reviews.

IRSS is not restricted to any theoretical or methodological perspective and welcomes contributions from anthropology, cultural studies, geography, history, political economy, semiotics, sociology, women's studies, as well as interdisciplinary research.

Since sport is a truly global phenomenon, IRSS is strongly committed to publishing contributions from all regions of the world, thereby promoting international communication among scholars.

IRSS (ISSN: 0074-7769)  
Quarterly: March, June, September, December

See Over for ISSA Membership Details



International Review for the SOCIOLOGY OF SPORT

Journal of the International Sociology of Sport Association (ISSA)  
Edited by Jim McKay University of Queensland, Australia

Contents (Vol. 32 • No. 1 • March 1997)

Articles

- Anne-Marie Waser and Eric Passavant  
Sport as a Leisure Time Pursuit among the Youth of Caen, France
- Kristine Toohy  
Australian Television, Gender and the Olympic Games
- Ken Sheard  
Aspects of Boxing in the Western 'Civilizing Process'
- Roland Renson, Eddy De Cramer and Erik De Vroede  
Local Heroes: Beyond the Stereotype of the Participants in Traditional Games
- Zhen Wang and Ernest G. Olson  
Present Status, Potential and Strategies of Physical Activity in China

Audio-visual Review

- Stephen Mosher  
Hoop Dreams or Basketball Nightmares?

Book Reviews

- Peter Brown  
Paradise of Sport: The Rise of Organized Sport in Australia by Richard Cashman
- Hajime Hirai  
Considering Modern Olympism (Tenri Yamato Culture Congress)
- John Nauright  
Kenyan Running: Movement Culture, Geography and Global Change by John Bale and Joe Sang
- Paul E. Dubois  
Worldwide Trends in Youth Sport by Paul DeKnop, Lars-Magnus Engström, Berit Skirstad and Maureen R. Weiss (eds)

・松村会員から日本で開催される下記のような国際会議のお知らせがありました。興味のある会員は、お問い合わせください。

○会議のテーマ

“Green is Beautiful: Train, Bicycle, & Tourism”

(南会津は美しい! : 鉄道、自転車、& グリーン・ツーリズム)

○会議の日程: 1997年10月17日~19日

場所: 福島県南会津郡下郷町

○全体会議 (18日 9:30~12:30)

(1) Bernard Lane (The Univ. of Bristol)

グリーン・ツーリズムの理念と現実: 英国の成果と課題

(2) Yoshihiko Oyama (The Univ. of Birmingham, The Jpn Centre)

ヨーロッパの草の根の挑戦: パートナシップによる展開をめぐって

(3) Seppo Aho (Faculty of Social Science, Univ. of Lapland, Finland)

未定: 極北のグリーンツーリズム-コミュニティから考える

(4) Hal Hiemstra (National Policy)

未定: 米国のグリーン・ウェイ運動 (廃線利用のグリーン・ツーリズム)

(5) Dag Leonardsen (Department of Education & Social Science, Lillehammer College)

未定: 大規模イベント (冬季オリンピック) からグリーン・ツーリズムへ

(6) Henning Eichberg (Research Institute of Sport, Body and Culture, IDRAESFORSK)

Movement Landscape: Scenarios and grassroots conflict: Experiences from a project of green revitalisation in a Danish agricultural region.

特別講演: Bob Bose (元サーレー市長、元UBC教授)

仮題: 自転車と街づくり (自治体の役割)

○サブ・セッション (全体会議に引き続き)

(1) Transportation 「移動手段を考える」

(2) Women & Tourism 「女性とツーリズムを考える」

(3) Municipality, Company & University 「グリーン・ツーリズム振興における役割を考える」

(4) Revitalization of Agriculture & Forestry 「南会津の林業・農業を考える」

(日本からの参加予定者、順不同)

・政井孝道 (朝日新聞大阪本社、総合司会) ・千賀裕太郎 (東京農工大・地域計画と環境保全) ・青木辰司 (いわき国際大・G. ツーリズム) ・市田知子 (農業総合研究所・女性とツーリズム) ・榊瀧俊子 (淑徳大・女性とツーリズム) 佐藤利明 (石巻専修大・農林業) ・土屋俊幸 (岩手大・農林業) ・田崎健太郎 (筑波大・自転車、スポーツ) ・伊藤太一 (筑波大・鉄道と国立公園) ・植木達人 (信州大・森林利用) ・飯田稔 (筑波大・野外教育) ・小椋博 (香川大・スポーツと環境問題) ・小谷寛二 (呉大・スポーツと地域開発) ・松村和則 (筑波大・事務局委員・総合企画委員)

\*なお、詳しい内容をお知りになりたい方は、南会津グリーン・ストッククラブ事務局 (芳賀沼伸、遠藤誠) にできればFAXでお知らせください。松村のところでも結構です。

事務局 電話 :  
FAX :  
松村和則

---

新入会員 / 住所・所属変更

---

<新入会員>

・大倉 秀介 (和歌山大学教育学部)

・中山 健 (鹿屋体育大学大学院)

・五十嵐 潤 (北海道大学大学院)

・早川 みどり (筑波大学大学院)

・平田 泰子 (同志社大学大学院)

・齋藤 健司 (神戸大学発達科学部)

・沼尻 正之 (大阪国際女子短期大学)

・出町 一郎 (東京大学大学院)

・市河 勉 (松山東雲短期大学)

・小幡 壮 (静岡県立大学国際関係学部)

<住所・所属変更>

・三浦 敏弘 (関西大学文学部)

・安田 國臣

・杉浦 恭

・山田 ゆかり

・永井 良和

・鈴木 秀人

・木村 和彦

・鈴木 守

・高橋 豪仁 (奈良教育大学)

・高島 陽子

・加藤 朋之 (山梨大学教育学部)

<退会者>

向井 肇晴

編集後記

第17号をお届けします。今号は、事務局が突然九州大学から奈良女子大学に移転し、心の準備や体制が十分に整わないまま編集作業に入らざるを得ませんでしたので本年3月の学会大会の報告や国際シンポジウムの内容がどの程度まで伝えられているのか(国際シンポジウムの内容は、本年度中に世界思想社から出版される予定です)はなはだ心配です。また、編集作業不慣れなため、ミスも多いことと思います。会員の皆様には、事情を察しただき、ご寛恕願いたく思います。

さて、今後の会報発行の実務は、記事中にもありましたように大手前女子大学の松田会員にお願いすることになっています。したがって会報の原稿はなるべくテキスト・ファイル形式でフロッピーか、Eメールで直接松田会員に送ってくださるようお願いいたします。その他の庶務、会計は奈良女子大学の菊が担当します。よろしく申し上げます。

(K)

日本スポーツ社会学会会報 第17号

発行：日本スポーツ社会学会事務局  
〒630 奈良市北魚屋西町 奈良女子大学文学部内  
事務局長：江刺 正吾

庶務・会計：菊 幸一

会報担当：松田 恵示 (大手前女子大学)

(会報原稿等送付先)

郵便振替口座番号：00390-0-43962

加入者名：日本スポーツ社会学会事務局

# 杉本厚夫編 スポーツシムランの社会学

四六判／二七八頁／一八九三円

スペクテイターとしての「スポーツファン」、メディアによって作り出される「スポーツファン」とは一体何なのか。「見るスポーツ」に焦点を当て、フアナティックにスポーツを愛する人々について考察した注目の書

鈴木みどり編

# メイジャー・クリケットを学ぶ人のために

四六判／三一八頁／二二〇〇円

今日メデイア社会で生起している問題の数々は、メデイアと私たちオールドファンとの側との一方的で不平等な社会的関係に深く関わっている。この関係をどう変え得るか——メデイア・デモクラシーの実現のために

ジャネット・リーヴァー著 亀山佳明・西山けい子訳

# サッカー狂の社会学

四六判／三三三頁／二二二三円

●ブラジルの社会とスポーツ  
世界最大のスポーツ・スペクタクル・イベント、ワールドカップ(W杯)を四度にわたって制覇したブラジル。その強さは何に由来するのだろうか。この疑問に社会学という視点から応えようとした貴重な一冊

G・ウオルフォード著 竹内 洋・海部優子訳

# パブリック・スペースとしての社会学

A5判／三六〇頁／三七八六円

●英国エリート教育の内容  
生徒、教師、舎監、寮母のそれぞれの生活世界に立ち入って、喜怒哀楽とサバイバル戦略を生き生きと描出。エスノグラフィとジェンダー論を分析技法にして結実した見事な社会学的ルポルタージュ

杉本厚夫著

1893円

## スポーツ文化の変容

●多様化と画一化の文化秩序 文化装置としてのスポーツが発信するメッセージを読み解いた労作

亀山佳明編

1631円

## スポーツの社会学

プロ野球、マラソン、ゴルフ、相撲等を通して、新たな視点からスポーツの「意味」をさぐる

井上 俊編

1893円

## 現代文化を学ぶ人のために

「都市、消費、情報、国際化」という基本的視点のもとに、多彩なテーマを通して現代文化を解説

江刺正吾・小椋 博編

1893円

## 高校野球の社会学

●甲子園を読む 文化社会学的な視点から高校野球を考察し、甲子園「神話」の深層に迫る

M・チクセントミハイ著 今村浩明訳

2427円

## フロー体験 喜びの現象学

幸福、喜び、楽しさ、最適経験などの現象学的課題の本質を多様な視点から解明した労作

上野加代子著

1893円

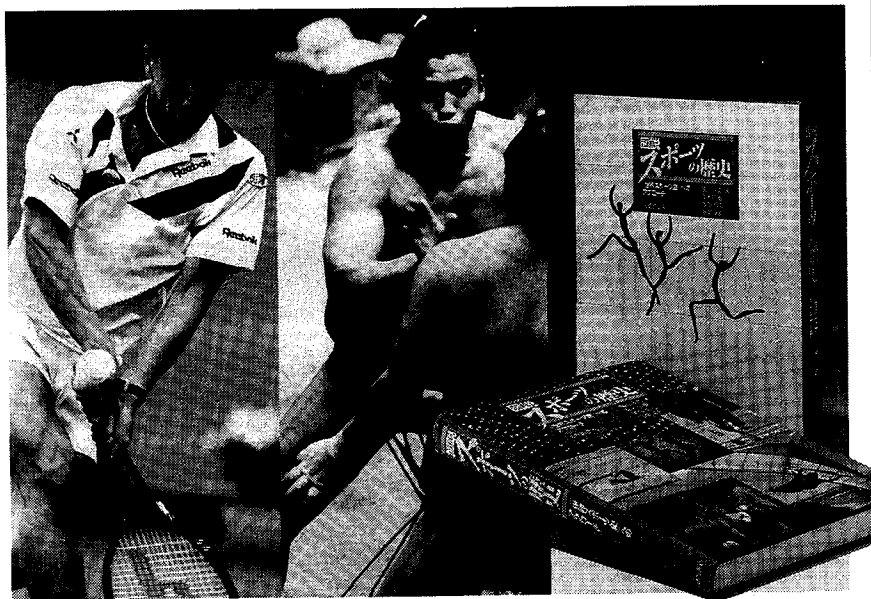
## 児童虐待の社会学

アメリカと日本における議論の展開を追い、児童虐待問題の今日的な成立をフーコーから読み解く

世界思想社

京都市左京区岩倉南桑原町56  
☎075(721)6506<消費税別>

スポーツの過去・現在・未来を写真で語る



【図説】

オールカラー

# スポーツの歴史

《世界スポーツ史》へのアプローチ

稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜正正[著] / フォート・キシモト[写真]

## 人間にとってスポーツとは何か 歴史的視点からその本質を問う

世界が動き、スポーツも動く。いま、なにもかもが大きく変化する時代。すなわち「後近代」の始まりである。この「後近代」の視座から民族スポーツと近代スポーツとを対比し、スポーツの「現在」と「世界性」を問う。スポーツとは何か、長い歴史的スパンからの提言。歴史的に貴重な珍しい写真、迫力ある現代スポーツの写真約700余枚によって構成された大型美麗本。



B4変型判・上製・函入・264頁  
4色刷り  
本体18,000円

【主な目次】

序章=スポーツの編年史 / 第1章=大航海時代とそれ以降の民族スポーツ / 第2章=近代化スポーツの系譜 / 第3章=スポーツの現在 / 終章=スポーツ文化の問題状況

大修館書店

【書店にない場合やお急ぎの方は、直接ご注文ください】▶Tel.03-5999-5434